

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開および委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第４回屋島会議
開催日時	平成２４年３月１日（木）１３時３０分～１５時３０分
開催場所	高松市役所 １３階 大会議室
議 題	屋島活性化基本構想（仮称）中間報告書（案）について
公開の区分	☒ 公開 ☐ 一部公開 ☐ 非公開
上記理由	
出席委員	植田委員（会長）、松村委員（副会長）、池田委員、井上委員、岩佐委員、上杉委員、小川委員、喜田委員、木太委員、竹内委員、新谷委員、林委員、藤岡委員、増渕委員、蓑委員
オブザーバー	四国森林管理局香川森林管理事務所長、環境省中国四国地方環境事務所高松事務所長、香川県環境森林部みどり保全課長（代理）、香川県商工労働部観光交流局観光振興課長（代理）、香川県観光協会会長、四国旅客鉄道株式会社常務取締役営業部長、高松琴平電気鉄道株式会社常務取締役、屋島山上観光協会会長、四国民家博物館理事、香川大学工学部長（代理）
傍 聴 者	３人
担当課および 連絡先	企画課 839－2135

審議経過および審議結果

次の議題を協議し、下記の結果となった。

議 事

（１）屋島活性化基本構想（仮称）中間報告書（案）について

（資料に基づき、屋島活性化基本構想（仮称）中間報告書（案）について説明。）

（事務局）

構成は、「１ 基本構想策定の経緯および目的」、「２ 屋島の現況」、「３ 屋島の特性・価値の現状と課題」、「４ 基本方針」の４項立てとなっている。

前回、議論いただいた基本方針については、「４ 基本方針」のところで説明する。

（１ページから４２ページまで）

基本構想策定の背景、経過、目的、屋島の現況等これまでの資料を再構築したものを記載。

（４３ページ）

これまでの議論を整理したもので、「３ 屋島の特性・価値の現状と課題」については、今後を考える前提として、現状の屋島が有する特性・価値を整理している。

「貴重な自然環境と良好な眺望」と「生活・生産と歴史・文化・信仰の地」を特性と価値であるとした上で、屋島は「高松市のシンボル」であったと認識している。

（４４ページ）

「屋島の特性と価値における課題の分析」について、「ウ」は、前回は「文化観光

審議経過および審議結果

の創造」としていたが、第3回会議での議論の趣旨を踏まえて、「高松市を代表する観光地」としている。

(46 ページ)

「共通課題」に、取組を効果的に実施していく仕組みの整備・構築が必要という前回の議論を基に「推進体制の整備・構築」を追加している。

今後、課題の解決に向けた取組は、個々、別々のものとして取り扱われるのではなく、情報共有をしながら、効果的に実施することができる仕組みの整備・構築が必要である。

また、基本構想を策定するに当たっての全体的な留意事項として、屋島の特性・価値の保存と顕在化、屋島の有する課題の解消、新たなアイデア（メニュー）の展開の3点をあげている。

(47 ページ)

「基本方針」は、前回までの議論の内容を踏まえて整理している。

これからの屋島の目指すべき方向性として、最終的には、世界に誇れる高松市のシンボル「屋島」を目指すとしている。そのため、屋島の有する特性・価値として示している「貴重な自然と良好な眺望」や、「生活・生産と歴史・文化・信仰の地」を総合的に保存・活用することで、「文化観光」を創造し、正に屋島が文化観光の核となるよう、屋島の特性・価値を再構築する。

「文化観光」の創造については、現在、把握している屋島の特性や価値だけでなく、まだ気付いていない屋島の特性や価値の顕在化を図ることで、今まで生かされていなかった自然・歴史・文化が生かされ、新たな文化観光が創造され、それが世界に誇れる高松市のシンボルとしての屋島につながっていくということで、「文化観光」の創造としている。

(会長)

事務局の説明について、意見、質問を出していただきたい。

(委員)

48 ページの「基本方針」の中で、「オ」については、前回の議論を踏まえて付け加えていると思うが、ここには「文化観光の創造」があったと思う。その中に、新たな屋島の価値付けや魅力の創出のために、今までになかったようなものを新しくつくろうという感じで議論したように思うが、そこがなくなっている。確かに「文化観光の創造」という言葉は、47 ページの中に大きく総括的に使われているが、前にあった「文化観光の創造」は、もう少し狭い意味であったように思う。その辺りはこれでいいのか。

(会長)

事務局の方からの説明はどうか。

(事務局)

前回の資料では、5 番目に「文化観光の創造」があった。「屋島の新たな価値付けや魅力の創出により、市民はもとより、多くの人を惹きつける「文化観光」の核として保存・活用を図る。」と記載されていた。その部分は、事務局の作業の中では、47 ページの青い部分の第2段落のところで、「屋島学」ということも含めて、屋島の

審議経過および審議結果

多様な価値を、常に調査・把握し、というところで、言葉足らずだったかもしれないが、新しい価値も含めて見出していこうということや、「屋島学」の中にもそういう趣旨を込めたつもりである。最後に広く周知をして人々を惹きつけることが重要であると、言わば、前回5番目で記載していたことを、基本方針の大きな柱の中に、「文化観光の創造」という形で込めているということである。

(委員)

きれいにまとまっていると思うが、言葉だけでなくもう少し具体的な案を示していただけると、もう少し我々も近づけると思う。言葉では素晴らしいが、実際に一体何ができるのか、「文化観光」と言っても、何ができるのか全然見えてこないで、是非、これから、もう少し具体的にこういうものをしてほしいという話になればいいと思う。これから会議に出てくるのであろうが、今、読んだところでは少し物足りないという思いがしている。

具体的には、これまで何度も言っているが、屋島は山上もいいが、形が素晴らしいので、あれをもう少し観光に生かしたもの、屋島をバックにして、能の舞台をすとか、具体的なものが出てきて欲しい。言葉で遊ばされるというのではなく、もう少し実現できるような夢を出して欲しい。

(会長)

大事な御指摘である。固定させる必要はないが、何か具体的なものがあつたらいいのではないかという意見である。

(委員)

少し気になるのが「観光」という言葉である。屋島会議が目指すものは屋島の活性化であるが、イコール「観光」であるのか。「観光」の在り方については議論が必要であるものの、「世界に誇れる高松市のシンボル」とあるが、前回のアンケートにもあったように、高松の人の屋島に対する認知度も足も遠のいている。高松市民、高松の都市の誇れる宝という方向性で、もう一度、屋島をしっかりと作り直すことが、結果的に県外の人や地域の人を呼び込む「観光」の一つになるのではないか。「観光」が前面に出ると、また、外向きの話ばかりになるのではないかという懸念がある。この「観光」という考え方はどのように考えているのか。

(事務局)

確かに最終的には、外に発信していろいろな人が訪れていただきたいという意味は「観光」に入っている。ただ、地元暮らし我々が誇りに思えない、地元の人が行ってみようと思えない愛着のないもの、認知されていないものを外に発信しても人を呼び込めるだろうかという、基本的な話である。「観光」という言葉は、単に県外の人ばかりに向けられたものではなく、これまでの議論を踏まえて、地元の方々の屋島に対する愛着の醸成等も含めて、観光の全ステップに込めて考えたい。

(委員)

趣旨はよく理解できるが、活字になって出ていくことで受け取る側のイメージがどうしても「観光」になる。メッセージとしては、「文化観光」が屋島再生の柱ですねというふうに見えてしまう。そうではなくて、もう一度、市民の宝・誇りというものを市民で醸成しながら、結果として、そういうものが観光にも使われて、県外の人も多く来てくれればいい、というのが前回までの議論だったように思う。今回、

審議経過および審議結果

また逆転して、「観光」が前面に出ていて、ものすごく違和感がある。

(会長)

趣旨的には違わないのだろうと思うが、印象というか書き方の問題である。

(委員)

書き方の問題であるが、もう一度そこから作り直さないと、屋島の再生は難しい。このアンケートでショックを受けたのは事実であり、全く環境が変わっている。そこからやり直すためには、外向けの話ではなく内向けの話をしっかり作り直さないと、屋島の再生は、まずあり得ないと思う。

(委員)

今、何が屋島の問題点なのかをしっかりと議論していくことも大事なことだと思う。大体の方向性は、「世界に誇れる高松市のシンボル」ということで、とてもありがたい言葉である。屋島に住んでいて、国立公園であり、千年の歴史を持つ屋島はとても素晴らしく、次の世代に残したい。

しかしながら、いろんな規制が掛かっていて、私の目から見ると何もできていない。屋島が野放図に荒れ果てているという印象である。荒れ果てている屋島を、国の方がもう一歩前へ出てきていただいて、廃屋などをすべて撤去していただいて自然公園に戻していただきたい。それに協力して、例えば、県は遊歩道の整備、市はケーブルの跡地利用など、具体的なことを、屋島をもう一度きれいに整備するということがとても大事だと思う。

(副会長)

いかにPRして、屋島を知っていただくかという、昔の原点に戻るべきであると思う。昔は、栗林公園、屋島が観光のメッカであり、香川の象徴でもあったが、今は、栗林公園で、屋島は置き去りにされているように思う。昔のようにピンとこないと言った方がよい。一度、原点に戻って屋島を見直すことや、PRの仕方を考えるのも一つの手である。ここに出ている「文化観光」を生かすにはどうしたらいいのか。その原点に戻ってもう一度新しい目で見直せばいいのではないか。

私は、小学生の頃、屋島は、学校から遠足ということで行っていた。それから、ある程度大きくなっても屋島に登っていたが、今は確かに遠のいている。市民の皆さんが、屋島をちょっと置き去りにしているのではないかという感じを受けている。ここで、世界の誇れる、と言うのであれば、高松で愛されている屋島というものを見直していくべきでないか。これはこれで文化観光の方でやるのだが、屋島を売り込んでいくためには、屋島マラソンなどスポーツの方でも生かして、また、他の方でも宣伝PRして行って、広く屋島を知っていただくということも考えていかなければならない。

(委員)

市役所の方々を始めとしてボランティアを募って、屋島学という言葉が出ているが、屋島について勉強する機会を設けて、試験なども実施して、そういう人たちを集めて、ボランティアがナビゲーターのような役で、駅前などの人が集まる所で屋島について話をしたり、出前講座のように、学校に行って屋島の素晴らしさを話したりしてはどうか。屋島を愛するということをもっともっと市民に知っていただくためには、そのようなナビゲーターがいると思う。屋島をもう一度勉強して知って

審議経過および審議結果

もらうようにしてから、また一歩進めることが、一番いいのではないか。

(会長)

高松の内部の人も良く知り、外の人も当然良く知る。両方である。方法論的に内部からが大事だという方もいるし、やはり、外に知らせようと思うと知らせることをつくらないといけないので、それはまた勉強することにならざるを得ない。その方法についてはもっと議論をして、いい方法をみんなで見つけていきたい。

内部にとっては、日常的に親しむ場であったが、変わってきており、その点は、原点に戻ってきちんと機会を増やそうということである。

蓄積されてくるともっといいものが、要するにすごいところだ、素晴らしいところだということについて再認識することが、屋島学の覚醒を図るということだと思う。これは非常に多面的価値がある。「文化観光」と書いているが、自然観光でも歴史観光でもある。自然、歴史、文化、これらがすべてあるところはなかなかない。

原点に戻りながら内部と外部と、ナビゲーターという意見もあった。

やり方についてよい方法を考えていくことが重要だと思う。

(委員)

もう少し具体的なことであるが、屋島には、日本3大狸の1匹である太三郎狸がいて、その狸は、全国の狸を集めて狸大学をつくったという民話をインターネットで読んだ。屋島は、姿も美しく、国立公園で、いろんな文化、歴史、自然、地形、総合的な価値があるので、世界の観光地のサミットみたいなものを屋島で開くということに名乗りを上げてはどうか。観光地は廃れる一方だが、そういうものを考えるという世界の基地としての運営を今からしてみてもどうか。歴史的に見ても、狸はそれをやったのだから、人間にできないことはないのではないか。

(委員)

屋島がいろいろな角度から見て、ポテンシャルや魅力は十分あるという認識は皆さん一緒だと思う。内向きに対して、屋島についてもう少し、深く掘り下げていくということと、それを広めていくためのナビゲーター、通訳者を養成していくことが、基本方針の5番目の先にあることかと思う。ただし、現状のままの魅力だけでは、今、人が行っていないということから見ると、何らかの具体的仕掛けは必要である。観光地サミットみたいな仕掛けで人を呼んできて屋島の魅力を分かってもらおうという点から、基本方針の後に出てくるもう少し具体的な方向について、私の投げかけとして考えたことを申しあげる。

例えば、健康ブームでジョギングやマラソンをする人がいる。トレッキング、マラソンコースを組むことも十分に考えられる。最初のころに出ていたが現代アートの作家に、空地のスペースや人がなかなか行かない北嶺などに、アートをつくってもらって誘導する。一番簡単にできることでは、近くにイサムノグチ庭園美術館があるが、香川県文化会館には、宝物のように持っている作品が20数点あるが、常設展示する場所もないのでしまわれているままである。これらを見せる場を整備するということが十分に考えられる。イサムノグチさんは亡くなられているので作品が増えることはないが、遊具は幾らでも複製が可能なので、屋島に行けばイサムノグチがデザインした遊具がすべてあるとか、眺望がいい所で体験できるということなど、具体的仕掛けにより集客した中でまた屋島を知ってもらうというようなことは、

審議経過および審議結果

これからのことを考えると必ず必要である。

(会長)

48 ページの基本方針の「オ」は硬い言葉であるように思われる。役所文書としてはこういう感じかと思うが、かっちり進めるという意味で推進体制という言葉はよいが、楽しみながら屋島を理解でき、それが魅力を発信する機会になるという、一つの取組自体が幾つかの目的を持ってやっていくことになる。仕掛けと言われたが、そういうものも合わせて考えるということの意味していると理解した方がよい。いい言葉があれば入れて、内容的に豊富にした方がよいかもしれない。我々が誇る屋島なので、誇るべきものなこと、我々自身も楽しみながら、理解しながら進めようということである。

もう一つ、高松や香川県にある他の資産とうまく連携することで、相乗効果を上げる取組を考えていくという話は大事な指摘だと思う。

中間報告でどこまで書くかということであるが、アイデアがどんどん出てきて、実行計画のような話になるかもしれないが、ここは中間報告であり、基本方針までを設定する予定であるが、具体的な話のイメージを持った上で、中間報告が出た方がよいと思う。

(委員)

もう一度話を戻したい。屋島会議の中で出す方向性が「世界に誇れる世界のシンボル」というのは間違いないことで、「文化観光の創造」というところも、高松市のシンボルの創造を目指すということになり、そこが中心になって、その活用方法に「観光」もあるということになっていくと思うが、「文化観光の創造」の中に、市民の皆さんの意識の協力や集約などを盛り込んで、その底辺がないと持続的な屋島の活性化とか活用法は見出せないのではないかと。

昔はそうだったので、活性化が「観光」というイメージはあるが、今後の屋島の活性化の核が「観光」ではどうしてもないと思う。事務局がなぜここにこだわるのか分からない。活用の方法として「観光」があるぐらいのニュアンスは難しいのか。

(事務局)

確認させていただきたいが、48 ページの「エ」で、具体的に市民一人一人が屋島の特性や価値を認識することが大事とか、地域の資源として愛着や誇りを醸成しようとか、それを次世代に継承発展させていくことの大切さを市民全体で共有しましょうという、基本方針の中で言われていることは書かれているものと受け取っている。

「観光」という言葉がしっかりと定義できていないが、いろんな交流の場になり、外から人が集まって地元の人もそこへ行ってそこが栄えるというイメージが「観光」とであると認識している。

(委員)

文章の問題かもしれないが、キャッチコピーは大変大事なものである。屋島の再生のコンセプトというのは、一つのキャッチコピーでみんなにメッセージしていくものである。そこに「観光」という言葉が出てくれば、屋島は「観光」で再生するというメッセージになってしまう。そこが怖いところで、それだったら観光業者でやればよいになってしまう。これまでがそうであったので、同じことにならないた

審議経過および審議結果

めにメッセージは、着眼点を変えた活字にした方がよいということである。

(委員)

前回、風光明媚、文化遺産、国立公園だけでは観光は無理だという意見を申しあげた。基本方針のフロー図はおかしいと思う。「文化観光」の創造」というのがこの位置にあるのは理解できない。「総合的な保存・活用」という形できて、文化観光はこの上の中の一つに入ってしまうのではないか。

アンケート結果を見ても、県外からの観光客の目的は、恐らく屋島寺でお遍路さんだと思う。自家用車で上がってくるパーセンテージが非常に高いのも、県外の方であり、観光バスも、恐らく屋島寺へのお遍路さんを乗せて来ているようなツアーのものではないかと思う。滞在時間が30分ということからもお遍路さんと思われる。

このようなものでなく、前から申し上げているように、市民の一つのソウルスポットみたいなものにしていくとすれば、観光というものはそれについて来るものであって、もう少し構築の方法を原点から立て直す必要があると思う。

(委員)

これまでの議論を経て、今回、基本方針という形が出てきた。いろいろと意見は出ているが、こういう構想の中でいろいろ考えていくことが大切である。先ほどの委員の意見にもあったが、あれこれ考えるよりも、この基本方針はできていることから、具体性のあるものを、箇条書きでもいいから列記して、基本方針に沿ったものを取捨選択して、更に話を発展させる、そのような形でやればいいのか。私は、第2回の会議が終わった時点で具体的な意見を事務局の方へ提出している。議論をすることは必要であるが、具体性があるものを皆さんが出して、それを事務局でまとめる形で進めてはどうか。どの程度のものが出てくるか分からないが、その中から実現性のあるもの、もっとこうした方がよいというものを絞っていきながら話を進めてはどうか。

漠然としたものの中で、評論家的なことの繰り返しばかりになっていくような感じがする。基本方針の中からそれぞれに具体性のあるものを事務局の方へ提出して検討していくようにしてもらいたい。

(会長)

48 ページは大体これでいいということか。

47 ページの大きな方向性の打ち出し方、まとめ方に議論があるようなので意見をいただきたい。

(委員)

48 ページはそれほど問題ないが、47 ページと 48 ページの関係性がよく分からない。基本方針の「ア」から「オ」は、47 ページの一番下の「世界に誇れる高松市のシンボル」に係るべきものなのだろうが、「文化観光の創造」という部分とどのような関係になるのか。例えば、「ア」や「イ」は「総合的な保存・活用」に重点がある内容であり、この2つの図の関連性がよく分からないので、そこをクリアーしていく作業は必要であると思う。

47 ページの「文化観光の創造」の部分で、第2段落と第3段落のつながりが分かりにくい。その結果、「文化観光の創造」ということがどういう意味にとらえられるのかということが不明確になって、一人歩きするという指摘でないかと思う。その

審議経過および審議結果

部分の改善は必要である。

(会長)

第２段落と第３段落の関連性についてもう少し具体的な説明をお願いする。

(委員)

第３段落で、第２段落を受けて「このため、」とある。第２段落の「「屋島学」の覚醒を図り」は、前回の話では、より創造的なものをつくっていかうという部分があって、「世界に誇れる高松市のシンボル」のための具体策として市民の側のアイデンティティを増やそうという内容が、第２段落にあると理解している。

第３段落の「地域の自然・文化に親しむとともに、・・・知的欲求を満たすことと」は第２段落を受けているが、「観光を融合させた・・・」の「観光」は、明らかに対外的な観光と受け取れることから、第１、第２段落から広がりすぎて、第２段落を受けたことから外れていく感じがする。

「観光」の部分をもう少し説明した上で、市内、県内の人と県外から来る観光客との融合をもう少し説明できるのではないかという気がする。

(オブザーバー)

地質学が専門であるが、なぜ屋島が世界に誇れるのか、どれくらい理解されているのか疑問に思っている。原点に返るということだが、屋島の原点とは何かと言うと、屋島そのものである。あの地形、あの山、あの石はどうだったかというところに原点がある。その舞台ができて、その上に歴史、文化がある。原点に返るのだったら、天然記念物の指定は昭和９年である。現代の地球科学の目から見て、これがどれだけの世界的価値があるかということを見直さないといけないのではないか。その辺りが一つ原点ではないか。

(委員)

原点に関連して、47 ページの「文化観光の創造」、第１番目の段落が観光で始まってしまっている。だから、先ほどからの意見が出てくるのではないか。屋島がなぜ大切なのかという点から言えば、屋島が高松市の代表的観光地であるだけでなく、非常に特徴的な地形、自然の環境など、自然、歴史、文化などの資源が豊富であるばかりでなく、高松市のかなりの範囲から明確に見える。そういう点で高松市のランドマークになっている。それを最初の段落でしっかり位置付ける必要がある。それに加えてもっと新しい価値を認識した方がよいということで、第２段落が生きてくる。そういう文脈の中で、第３段落を考えていけば、いろんな意見を解消できる方向があるのではないかと思う。

(委員)

「観光」という言葉を気にしていることはよく分かる。かつて栄えていた時は観光の地屋島というのがあった。ここで私たちが何をしなければいけないかというと、新しい価値を創造していくということだと思うので、キーワードとして「観光」が出てくると、かつての姿を取り戻すということになってしまう印象がある。それとは違うという姿勢を示すのなら、あえて「観光」という言葉を使わずに、たとえば意味が一緒でも、絶対に「観光」という言葉を使わずにコンセプトを立てるということをやらないと、どうしても２番煎じで、かつての姿を蘇らせるということになってしまう。例え、言葉の問題とはいえ、言葉は非常に大事であるから、キャッチコ

審議経過および審議結果

ピーとしてここで使うのであれば、「観光」は外していいと思う。

(委員)

原点に戻ると言っても、今は観光地もネットやブログでどんどん展開が変わってくる時代なので、総合的な活用という、スタンスの上に立って議論していった方がいいと思う。昔に戻るといってもそれは単なる懷古主義にすぎないということもあり得るので、もう少し切り口を新しく変えていく必要がある。今までの切り口はいろんな面で試してみて、結果としていい結果が出ていないというのが現実である。

(オブザーバー)

日本ほど「観光」という言葉を誤解されている国はない。日本は大戦に負けて、ものづくり大国を目指すということで、一生懸命働いて、わき目も振らずに働いて大国になってきた。その副作用として、世界の潮流である「観光」という言葉を誤解している。「交流」と言ってもいいが、それは一人前の産業ではなく、遊びだと、それも単なる遊びだと、このような時代になってきた。

しかし、世界では、観光交流は最大の産業である。その中で、本来、観光とは何かということになる。本来、「観光」は国を見ることと決められている。その地域に住む人が、国の光を見る。すなわち宝物に気が付く。その宝物を磨いて発信する。そして、多くの人に自分の故郷の光を見てもらう。これが「観光」の定義である。ところが日本は時代背景の中で「観光」は物見遊山であると、戦後なってしまっているが、世界はそうは考えていない。

その中で、「観光」という言葉ともう一つ「交流」という言葉がある。観光交流というふうに定義した方がいいのではないか。「観光」は大変誤解されている。その中で誤解を解いていくためには、観光は世界との交流だと、その中で国の光を見て、その光を世界中の人に知ってもらう。これが本来の趣旨である。

木村尚三郎先生の「「耕す文化」の時代」の中で、これからは文化の時代であり、文化は交流の中から育ち、交流のない所には文化も育たずに、いずれ滅びるであろうということを明言している。そのようなことから考えると、観光交流、大勢の人に来ていただく。しかし、物見遊山でなく、わーと来て、わーと帰る、かつての修学旅行も悪くはないが、それは21世紀型の観光ではない。本当の観光は、ここに書いてある「文化観光」というものである。

また、前回、芸術祭のことを話したが、世界中から来た人に瀬戸内海の美しさや讃岐の良さを理解してもらえたと思う。要するに、観光交流で、世界中の人、日本人のすべての人がここへ来て、いろいろなものを食べておいしい、また、いろいろな文化があると理解してくれる。言わば交流の世界である。グローバルの時代になったこれからを考えれば、国単位でやっていくといろいろな軋轢があるが、世界中から来る観光のお客様、交流のお客様は国境がなく、そのようなことを考えない。スポーツでは国境がある。そういう意味では観光・交流というのは、これから、この素晴らしい屋島を含む高松全体を知ってもらうという意味から非常に大切である。これから考えていく「観光」は、かつての狭い意味の観光ではない。

(会長)

大変重要な意見であり、本当の意味を知ると違った内容になる。

(オブザーバー)

審議経過および審議結果

瀬戸内国際芸術祭の連携の話が出たが、これはかなり大きなきっかけになる出来事である。3月末の実行委員会で第2回の実施計画が決まり、来年3月から始まる。3年ごとに開催されるという中で、前回の会議では、屋島が大きく立候補して手を上げましょうという議論がなされていたと思う。このことは、この基本方針の中に取り入れて、明確に手を上げて、積極的に現代アートと連携して、これを契機に、屋島の復権運動をやっていくと明記してもおかしくない議論だったと思う。

金子元知事の本を読んでいて、その中で、香川の美しい見せ方という項目があり、香川の目標は瀬戸内に面しているから、「瀬戸内海が美しく見えるように」ということになったという言葉で始まる。これはまさしく屋島に言えることで、具体的な言葉が「文化観光の創造」という言葉に置き換わっていくということが、中間報告としては必要ではないか。ちなみに、瀬戸内国際芸術祭では、テーマが「海の復権」という非常に哲学的な言葉で、そういうキーワードである。

(委員)

最初に発言したように48ページも不首尾である。前回の会議にあった、具体性を持った新しい価値、新しいものの創造を加えていこうということが48ページの文章からはなくなってしまっているということが一番言いたかったことである。

「オ」が加えられたからといって、5項目で固定ということではなく、6項目なくても構わないと思う。是非、第3回会議の時に出てきた屋島学という言葉に集約されていた新しい価値観、現代にマッチしたそういうものを今から創造し、考えていこうという項目は入れないといけない。基本方針を起点に具体的な作業が進められていくと理解するので、ここは項目を増やして欲しい。

(委員)

そこまで行くと基本方針の上に立った具体策である。私は、今回、具体策が出てこなかったこと自身が問題だと思っている。基本方針の部分は書き直す必要があると思うが、基本方針は基本方針として、その上に具体的にどんなアイデアを展開していくのかということが出てこないといけない。

具体的な案を基本方針と並べると、全部同じ扱いになってしまうので、逆に、バランスが悪くなる。本当は、(2)の次に、(3)として、例えば、当面考えられる具体的な活性化策というものが出てこなければいけなかったのではないかな。前回の会議で具体的なアイデアが幾つか出てきたことであり、「ア」から「オ」までを適切に果たしていこうとすれば、屋島は自然としての遺産、文化的な遺産もある、景観、見た景色が素晴らしいと思うのは極めて文化的な心の作用であり、そういったものを地元の人に公開する、指導する、あるいは香川大学がプロジェクトをつくって、屋島の新しい価値を発見するという動きをやっているとすれば、その成果を屋島で公開するのがいいのではないかな。そうすると、例えば、ビジターセンターのようなものがあればいいとか、いろんなアイデアが出てこないといけないのではないかな。その中で、平成24年度からできそうなもの、具体的に施設がなくても今の段階でやれそうなものが出ていてもよかったのではないかな。

(委員)

前回の資料の中にあった、「屋島の特性・価値の保存と活性化を両立するため、新たなアイデア、メニューを導入し、」という文章が必要であるということである。

審議経過および審議結果

こういうものが入ってくると、屋島会議という、具体的なことも考える窓口があるというドキドキ感が生まれてくる。具体的なことをここで示すということではなく、「ア」から「オ」の中には、新たなアイディアということに関連付けられるような項目ではなかった。そこを増やして欲しい。

(会長)

基本方針のところで、委員の言われる意味は、伝統的にある、あるいは昔はそうだったというような特性や価値だけではなく、価値創出、新しい取組の中で生み出されるものもあるのではないかと、そういう取組方も基本方針に位置付けて欲しいという趣旨だと思う。それは確かにその通りであり、そういうことも含めて議論してきたので、何らかの形そのような文章を、「オ」の前に入れておくのがいいのではないかと。

それから幾つか大事な問題があって、確かに芸術祭はともかくとして時間軸上の取組方を全然書いていない。すぐ取組むこととか、具体的アイディアとかはここでは論じられていない。それは皆さんの頭の中になんかあり、部分的には出していただいた。それは後に書き込むというのは一つのやり方だと思うが、それは決めてしまうというものではない。(3)として、実施する方向性について少し具体策の要素を入れてはどうか。中間報告を受けて議論するつもりだったのかもしれないが、ここに書き込んだ方がいいというのが委員の皆さんの意見のように思われるのでお考えいただきたい。

もう一つ、47 ページの「文化観光」の本当の意味を説明するようにするというのもいい考えであると思う。光を見る、ということが観光本来の意味であり、交流という趣旨を念頭に置くということである。これを変えずに本当の趣旨を説明することもあるが、まとめ方に工夫が必要かと思う。

書き方としては、確かに、第1段落は世俗的な観光の意味になっている。屋島の価値を全面に出せるような形で、文章的には、第1、第2、第3とも改良が必要である。

全体のタイトルをどうするかは大きなことであり、意見としては屋島の総合的な保存、再生、活用というニュアンスとなっている。

(委員)

観光地と書くから観光地ではないということになり、もっと大きな視点で、最初にシンボルであるということ、高松市民は、そう位置付けないとだめだと思う。栗林公園や高松城は後でできたものであるが、屋島は元々あったもので高松市のシンボルということ、まず最初に謳わないといけない。代表する観光地と書くから少し違和感がある。

(委員)

最終的に目指すのは誇れる高松のシンボルに屋島を位置付けて再生を図るのが方向性だと思う。そのためには屋島の持っている本来のパワーとか、資源を再認識して、新しい価値など付加価値を付けて、一番大事なものは、市民がそれを知り、自分たちの都市のランドマーク、シンボルとして理解し、愛着を持って一緒に育てていくという意識の醸成とあいまって、そこにつながっていくことである。3番目の具体的な活用の中に、観光という使い方ですっかり盛り込んでいくとか、

審議経過および審議結果

瀬戸芸との連携を図っていくなどいろいろなことが出てくると思う。そこが、逆転してしまうと、すごく狭い領域の中での再生方法となり、観光政策の活性化方法のようになるので、考え方を変えるべきである。

(委員)

基本方針の最上部が2つあって、次に「総合的な保存・活用」、次に「文化観光の創造」とあって、その言葉の最後も屋島を保存・活用するとなっている。保存・活用として観光となると、焼き直しというイメージがものすごく強い。今あるものを保存して活用するよりは、もう少し創造性を含んだ意味の言葉、例えば、創造という言葉が使われているが、それに合致するような言葉が使われていないので、再生や創出など、新しい価値をもう一回ゼロから始めてつくり、見出していくというニュアンスをもう少し積極的に出してはどうか。

3番目の項目として具体的な案があってよいと言われたが、もう少し読む人がわくわくするような躍動感、前向きな感じを受けるようなになればいいと思う。

(会長)

最後の部分は、具体性が欲しいという意味か。

(委員)

文章の話かもしれないが、前半の議論をもとに、これを読むと少し分かるかもしれないが、これだけ読むと何一つ具体的なところに結び付かない文章になっている。もう少し踏み込んだ形で、次のステップに続く躍動感が欲しい。

(委員)

屋島の活性化の方向性にあるシフトマップ自体が、今までの現状把握と課題の整理をした上で成り立っており、文章だけをまとめてきたイメージを受ける。具体案を出すのは、この状態では難しく、これから先の基本計画、実施計画としてまとめていくものだと思う。方向性という意味では「世界に誇れる高松市のシンボル」はどちらかというと、みんなが共通で持つスタンスの確認という意味になると思う。着地点は、スタンスの確認ではなく、そこから立ち上がっていくものだと思う。

そこから展開していく方向性として、多面性を活用した新しい価値の創造など、屋島の多面性をいろいろ切り口で運営施策を立案していくこととなる。具体的には、瀬戸内国際芸術祭への参加などのアート、歴史、コミュニティの交流、観光交流、市民レベルでのイベント、エンタメなど、多面的な切り口で、それぞれを積極的に活用した施策を組んでいくという方向になると思う。方向性のシフトマップ自体を、もう少しわくわくという期待感が持てるものにつくり変えていってはどうか。

(会長)

具体的にどのようにするかということが、まず大切なことであるが、真ん中の「世界に誇れる高松市のシンボル」というのが、一番下に来るのは確かに違和感がある。

(委員)

「世界に誇れる高松市のシンボル」は最終点ではなく、スタートの地点である。「文化観光」というのは、先ほど「観光」の意味を教えていただき、それも一つの手段であるが、「世界に誇れる高松市のシンボル」である屋島を、総合的な再生・活用、新たな価値を創出するために、貴重な自然環境、良好な眺望、生活・生産、歴史・文化などに鑑みて検討していくという順番でいくと、この組立図自体に変更を要す

審議経過および審議結果

るのではないかとということで先ほど申しあげた。

(会長)

一方向になっているのが間違いではないかと思うので循環させてはどうか。「世界に誇れる高松市のシンボル」は、出発点でもあるし、結論でもある。我々はそう思っているが、みんなはそう思っていないという面もある。それを認識し直すと、再認識、再発見がある。

それから、原点も大事であり、歴史的にも大事だが、同時に価値創出の部分で新しい要素も付け加わっていく。それがまた、新しい交流の場や機会をつくっていく。それがまた価値を認識し、つくり出すことになる。交流は異なるものとの接触という面を持ち、文明の橋渡しをすることである。これらのことから、サイクル的に回してはどうかと思う。

高松市民の現在の認識としては、決して世界に誇れるシンボルとっていないかもしれない。そう思う人を増やしていくプロセスをどのように描くかということで、その途中で具体的な事業の実施が入ることになる。基本方針を決めて行うものであるが、サイクルは回さないといけない。基本方針を、実施計画にしていって、実施するとまた課題が出てくる。それを回していって、最終的にはこういうものを目指すということではないか。その状態がまた出発点となり、それでさらに次に進んでいこうという感じがする。皆さんの意見からはそのようなイメージがする。

現状は、すぐにやれる訳ではなく、やれることはかなり限られている。そこから出発して、それが新しい価値創出や原点の再認識につながったり、観光の考え方が変化して、とてもいい交流の機会として生かすということにつなげていくという取組が基本的な活性化の方向性ではないか。それを受けて基本方針とその次に実施計画が出てくることになる。

これは書いてみないと分からないが、一方向に下に行くと違和感があり、このようにしてはどうかと思う。

(委員)

「文化観光の創造」を「文化と交流の創造」としてはどうか。

(会長)

先ほどの「観光」についての説明はよかったと思っている。言葉の本当の意味はある。表題として使うかどうかは別であるが、「観光」とは本来こういう意味であるということで、市民の宝を磨いて見てみるという趣旨を入れた上で、「観光」を理解し直すことが、また屋島の価値の再発見にもつながると理解していった方がいいかと思う。説明が多くなるとよくないのでうまくやらないといけない。

(委員)

せっかく形が変わろうとしているので、一つお願いがある、この「世界に誇れる高松市のシンボル」という言葉自体を、もっと素敵な言葉に変えないと夢がなくなってしまうという印象を持っている。1週間ぐらい時間をもらって、委員、オブザーバーの方から、表現を募集していただきたい。

(会長)

いかがでしょうか。先ほど哲学的な言葉がいいという意見もあったが、確かにいい印象が残る方がよいとは思う。しかし、逆に言うといい言葉が見つからないと、

審議経過および審議結果

何を言っているかわからなくなる可能性もある。見付けられる力があるかどうかを試されることで、なかなか大変であると思うが、そのような目標があればいいと思う。「世界に誇れる高松市のシンボル」は副題のようなもので、表題として、屋島をぱっとイメージできるフレーズがあるかもしれない。ただ、今までなかったものであり簡単にいくとは限らない。

(委員)

基本的な方向はそういうことでよいのではないか。

(会長)

事務局としてはその方向でよろしいか。

(副市長)

方向性のマップについてはよい知恵をいただいたので組み直してみたい。

また、「観光」という言葉の問題があるかと思うが、一般市民の方には、「観光」という言葉は、また観光で再構築するのか、また観光か、ということで、広がりが生じないということがあるということも指摘の通りだと思う。「文化観光」について解説しながらも、キーワードとして「観光」という言葉を使うことについては、あえて止めてもよいのではないかと考えている。皆様の意見をまとめていただきたいが、瀬戸内国際芸術祭の関係や、「観光」の本来の言葉の意味、交流ということをしっかり書いた上で、キャッチフレーズとして何を出すのか。あえて「観光」を外して、それが屋島のもとからある価値を前に出すということになり、それがこの会議の目標だと思うので、そういう感じで整理をしていく必要がある。

具体的なメニューについては、今後議論していくことだと思うが、46 ページで、具体的な方向性は多少出ており、課題を新たなアイデア、メニューを導入して効果的な展開を図ろうということを書いている。これが基本方針のところに組み込まれていないということは整理したい。

最後に、特に「世界に誇れる高松市のシンボル」という言葉で、わくわくするようないい言葉、それが循環して、市民にも訴え、それがさらに外にも発信できるような、「世界に誇れる高松市のシンボル」に代わる何かいいキャッチフレーズ的なものを位置付けていただくとありがたい。ただ、スケジュールの関係で、事務局としては、まとめられた中間報告を3月22日に発表させてもらいたいと考えている。それまでに、委員の皆様、会長のお力でいいものをつくっていただければと思っている。

(委員)

「文化観光」という言葉を、キーワードとして残すのであれば、基本方針の中の「ア」、「イ」に、「文化観光」に通じるような内容が書かれてある。基本方針の「ア」、「イ」をうまくまとめて、「文化観光」という表現を取り入れて、基本方針の一つとして、文化観光の創造として、いろいろな資源を保存しながらそれを生かした地域づくり、山づくりを目指そうというのが、一つの方向性かもしれない。そういう内容に変えていけば、基本方針の中に「文化観光」の言葉を残していけると思う。

(会長)

基本方針の中に「文化観光」を説明する内容が入った方がよいということか。

「世界に誇れる高松市のシンボル」に代わる言葉を出さないといけない。責任は

審議経過および審議結果

重い。だめだというのは言いやすいが、事務局としても一生懸命つくったもので、もっといいものがあれば当然そちらが出てきている。屋島の持っているシンボル性が何かということを表して欲しい。どれぐらいの期間で出してもらえばいいのか。

(事務局)

時間的な余裕は、二、三日ぐらいしかない。

(オブザーバー)

世界に誇れるものは何かと言うと、山頂の溶岩をつくったマグマの作り方というのが、実は世界的な出来事である。

それを抜きに語れないということで、その研究をしているのが、京大から東大に行って、今、世界海洋研究開発機構にいる世界のマグマ学者 巽好幸さんである。彼に3月3日に来てもらって、3月4日に彼が屋島を案内する。私と一緒に案内する予定であるが、世界的な価値がどこにあるか、勉強したいと思っている。

(会長)

「文化観光の創造」の中にも書いてあるように、我々自身が屋島学をやって、覚醒を図らなければならない。それで初めてシンボル性を表すことができる。指摘いただいたことも勉強しながら、同時に、歴史性、形やランドマーク的な要素があるなど、たくさんの事項があり、全体をうまく言えたらいいと思っている。価値の創出ということも含めて、皆さんに期待する。よろしく願いたい。

基本的な書き方としては、活性化の方向性は、我々自身が高松市のシンボルの屋島のどういう点が誇れるのかということ、現状から出発して再認識し、それを活用、勉強をしながら、それが第1段の活性化につながる。そこでまた価値認識が広がり、それがまた次に、というようになる。それが交流や観光の機会を増やすという、循環的で、それも単純な循環でなく、経済学的に言うのはよくないが、単純な再生産ではなく、もう少し広がっていくというニュアンスの大きな方向ということをお願いしたい。

そこには実践的なことがあって初めてうまくいくかどうかがある。芸術祭で取り組むということも意味があると思う。

基本方針のところでは2つ意見をいただいた。

一つは、「観光」の本当の意味の内容、市民の宝を光り輝くものにして、その光を見てもらうという趣旨である。それが交流を生み出して、それがまた、新しい価値の創出を生み出す。現状の基本方針は、これまでの特性や価値をというニュアンスが強い。それも大事だが、新たな着眼点で、新たな創出を考えるようなニュアンスを入れることとする。

もう一つは、(3)になるが、実施計画的な要素は大事だということである。事務局の説明では、46 ページの留意事項に書いてあるが、確かにわくわくするような書き方ではない。どのようにわくわくするように書くかという問題はあるが、ここに、実施計画的な要素のようなものを少し入れ込んでもらいたい。

難しい宿題になるが、委員、オブザーバーの皆さんから知恵をもらったらいと思う。意見を踏まえてつくり直したものをみんなに送ってもらいたい。時間がなく大変な仕事になるが、最後は皆さんの意見をいただいて、私自身の方で取りまとめるということによいか。

審議経過および審議結果

－了承－

(会長)

皆さんの名案を待っている。そのためにも、事務局にはつくり直したものを早めに送っていただきたい。

(事務局)

作業的にはまず、「世界に誇れる高松市のシンボル」に代わるキャッチフレーズは先に出していただくということになる。遅くとも月曜日中には事務局にお送りいただきたい。それに併行して、指摘のあった点など全体直していく。

(会長)

つくり直したものを、一度フィードバックしていただいた方がよい。

その日のうちに返事をいただく感じでやらざるを得ないと思うがよろしいか。

大変重要な指摘をたくさんいただいているが、今のようにまとめて中間報告にさせていただき、最後は私の方で取りまとめさせていただきたい。

－了承－

(2) その他

(会長)

その他について、事務局からお願いします。

(事務局)

2点ある。1点目はシンポジウムの開催についてである。中間報告書がまとまった段階で、もう少し多くの市民の方々に知っていただき御意見をお伺いし、さまざまな視点から屋島の活性化についての御意見をいただいて、今後の屋島会議の議論の参考とさせていただくために、7月中旬ごろに屋島会議が主催するシンポジウムを開催したい。中間報告の発表とパネルディスカッションを予定している。

2点目は、24年度の屋島会議についてである。今年度の会議は本日で終了であり、来年度は、シンポジウム以外に3回の会議を予定している。引き続きよろしくお願いしたい。

(会長)

大変勉強になった。この場にいない人にも聞いていただくことは大事である。いろんな人来ていただきたいと思っている。

24年度もお願いしたい。

－議事終了－